

Ⅱ 特別シリーズⅡ

※現在、さくらサイエンスプランは新型コロナウイルスの感染防止のため、今年度のプログラムの実施を延期しています。

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプラン』友情と感激

第226回

和歌山県立医科大学の活動報告



多中良栄
(和歌山県立医科大学
医学部講師)

韓国の2つの大学から招へい

和歌山県立医科大学医学部では、科学技術振興機構(JST)「さくらサイエンスプラン」の支援を受け、2018年度と2019年度に、韓国から大学院生と若手研究員、教員を招へいした。18年度は、2019年1月23日(29日)の7日間、科学技術聯合大学院大学(UST)と慶熙大学(薬学部)の大学院生(5名)と教員(1名)を招へいし、「和歌山の最先端医療技術体験と和菓の源流を学

ぶ」をテーマに研究交流を行った。19年度は、2020年1月15日(21日)の7日間、USTと忠南大学校(医学部)の大学院生(6名)と教員(2名)と韓国標準科学研究院の研究員(1名)を招へいし、「先端医工学体験プログラム」を実施した。ここでは、2019年度に実施したプログラムについて紹介する。



集合写真(2018年度)。前列右から2人目は茂里康教授、前列左端は多中良栄講師

ポスター発表(2019年度)



集合写真(2019年度)

先端医療技術・医工学の体験

忠南大学校は、韓国の中部地方を代表する韓国屈指の国立総合大学である。また科学技術聯合大学院大学は、韓国の科学技術系の29の国立研究機関が共同で設立した大学院大学である。両大学で、医学・工学・生化学等を専攻する大学院生や若手研究者が、日本の最先端医工学技術を学び交流を行う事で、将来の医工連携や交流協定締結の可能性を模索する事を目的とし、プログラムを実施した。和歌山県立医科大学医学部および付属病院では、先端医療技術や医学教育の現場の見学・交流会を実施した。日韓の相違点や共通点を踏まえ、多くの質問がなされ、双方有意義な意見交換が行われた。

プログラム	
1日目	到着 オリエンテーション、歓迎会
2日目	島津製作所訪問 金閣寺、錦市場見学
3日目	健栄製薬訪問 少彦名神社見学 研究発表会(サントリー生物有機科学研究所)
4日目	茶道体験、交流会(医学部生)
5日目	合気道体験
6日目	和歌山県立医科大学大病院訪問 (スキルスラボ、 総合産産期母子医療センター、中央検査部)
7日目	関西国際空港にてお別れ



合気道体験 (2019年度)



裏千家流茶道の体験 (2019年度)



発表と学生間のディスカッション (2019年度)

最後に、このような機会を提供して頂いたJST関係者の皆様、ご協力頂いた皆様に改めて感謝申し上げます。

発表と学生間のディスカッション (2019年度) 韓国は、「近くて遠い国」とも形容される。実際の距離は飛行機で数時間でありながら、文化や言語、考え方の違い等から、心理的に「遠い」と言われる事もある。今回のプログラムにより「近づいた」人との距離を継続し、研究活動の発展等に繋がっていきたい。またさらに学生の国際化に対する意識や、アジアの隣国との友好関係を広げていくためにも、今後とも人々との距離を近づける交流活動を継続していきたい。

日本文化の体験と学生との交流

和歌山県立医科大学・医学部の学生とは、化学実習の見学(プロテオミクス解析ソフトおよびタンパク質構造解析ソフトを用いたコンピュータ実習)、USMLE (United States Medical Licensing Examination) 米国医師免許試験) サークルとの学

また島津製作所で、ヘルステアR&D製品の見学、高速液体クロマトグラフィー(HPLC)及び質量分析計(LC-MS、GC-MS等)の組み立て工場の見学を実施し、精密機器・計測器・医療機器・航空機器の最先端技術を有する日本のトップメーカーの現場を体験した。医療や研究の基礎となる最先端分析技術の製造現場を肌で感じる事が出来たとの感想が出された。

さらに、公益財団法人サントリー生命科学財団・サントリー生物有機科学研究所では、分子イメージング・質量分析・核磁気共鳴分析等の先端機器分析・構造解析等の基盤技術を見学し、同時にミニシンポジウムを実施した。ポスター発表では学生自身が発表者となり、研究者らとの活発な討論が繰り返された。また、日本の薬の黎明を支えた道修町(大阪市)にあり、「消毒薬・局方品のナンバー1」の国内企業である「健栄製薬」と、近隣の「神農さん」と呼ばれ広く知られる薬の神を祭る「少彦名神社」と、神社に併設される「くすりの道修町資料館」を見学し、日本の薬の発展の歴史を学んだ。

「近くてもっと身近な国」を目指して

実施後のアンケートによると、招へい者の満足度は非常に高く、再来日への意欲も高かった。研究交流・体験プログラムに次いで、日本文化の体験が好評で、日本に対する関心・興味が幅広く、今回のプログラムに参加する事で、さらに理解が深まった様子が伺えた。本学の学生にとっても、学術的・文化的交流は良い刺激となっている。学生同士での連絡先の交換も自的に行われ、その後も交流が続いている。また現在、招へいした研究者らとは、日韓で共通する「漢方薬・伝統医薬」に関する論文を共同で執筆中である。

術交流や、合気道部、茶道部の活動に体験参加し、交流を深めた。合気道は和歌山出身の植芝盛平が創始した日本固有の武道であり、部活動でも熱心に取り組まれている。招へい者らも見学だけでなく実際に体を動かして、合気道の動きを体験した。また茶道部の学生による茶会に参加し、薄茶や季節の菓子を楽しんだ。茶道の歴史や、茶道具や手前についての学生からの説明にも興味深く聞き入り、実際にお茶を点てる経験ができた事も、印象深かった様子である。

本学の学生は、特に合気道や茶道では「専門用語」の入る内容を説明する事に、苦労したようである。しかし実際に動きながら、また作業をしながら、何とか伝えよう、理解しようという双方が努力する事で、当初の緊張はほぐれ、円滑に意思の疎通が図れるようになっていた。学術交流等では、招へい者は日本語で、本学の学生は韓国語でまず挨拶をする事が多かった。自国語で話しかけられた側の表情から緊張感が瞬時に抜けるのを見て取れ、それだけの事で距離が縮まることを実感した。